

## 南王子村の部落形成史(1)

——信太明神境内から「古屋敷」まで——

高 阪 謙 次\*

The Formative History of Minami-ohji Village (1)  
—From The Precincts of Shinoda-Myojin to 'Furuyashiki'—

Kenji KOHSAKA

### はじめに

部落史という研究分野がある。被差別部落の歴史を扱った分野であり、全体的には人文科学に属する学問である。その内容は従来、政治史、経済史、社会史、地理史などや、その境界のない複合的な究明を扱ってきた。しかし、部落の物的環境に着目し、その形成の歴史を系統的に究明しようとする試みは、筆者の調べた限りにおいては、無かった。

筆者は日本では工学の一分科学とされている建築学分野に属しているが、その中の歴史・意匠史の中には、都市史という研究領域がある。都市や地域の物的環境がいかに形成されてきたか、それとの関係で住民がいかに生活していたかを究明する領域である。筆者は、研究者として養成される時期に、この都市史の一部に関わる研究をしてきた。

本稿は、以上のような部落史研究の現状と、筆者の研究的背景から、被差別部落の物的環境の歴史と、それとの関係における部落の生活の歴史を明らかにしようとする試みの、最初の報告である。

被差別部落の物的環境は、1970年頃、概ね、極めて劣悪なものであった。1969年に成立した同和対策事業特別措置法（同対法）や、それを継承した1982年の地域改善対策特別措置法（地対法）などによる「同和対策事業」によって、この時期における物的環境の当時としての問題点は、2000年頃には基本的に解決されたと言ってよからう。

しかし、この事業による改良住宅の建設や道路の改善は、この地域にあった歴史的な物的痕跡の多くを、消し去ってしまった。被差別の忌わしい物的環境を除去して、新たな時代を切り開くことは重要な課題である。それと同時に、その劣悪な環境の事実を記録し、そうした環境が形成されるに至った歴史的な過程を究明することも、大切な課題であろう。

そうした意味で、本稿の対象である南王子村には、江戸時代の寛文（1661-）以降の『奥田家文書』と、明治以降の『大阪府南王子村文書』の、一被差別部落に関わる膨大な行政文書、庄屋文書が遺され、1960年代の終わりから1980年にかけて活字化されてきた。そ

---

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科

の中には、物的環境の歴史の研究にとっても貴重な、多くの資料が含まれている。

70年代半ばから80年代にかけて、この『奥田家文書』を元に、多くの論文・著書が発表されてきた。しかし、物的環境に関しての系統的な論究は、貴重な資料があるにも関わらず、なされてこなかった。本研究はこうした背景から、南王子村（以下「本村」と略す）の研究を通して、一被差別部落の物的環境の歴史的な形成過程を明らかにし、上記の課題に対する一資料にしようとするものである。本稿では、その前史とも言える信太明神境内に居住したと言われる時期から「古屋敷」の時期までについて述べる。

## 1. 南王子村村民の先祖について

### 1-1 聖神社との繋がり

先行研究の一つは、本村が「いつごろ、どのように成立したのか、くわしいことはわからない」としている<sup>1)</sup>。しかしその村人たちの先祖は、信太郡（現大阪府和泉市内）にある聖神社（別称信太大明神）にゆかりの者であった、との口上が、文献には残されている。明治2年1月に当村の庄屋と組頭が連名で「池田下村御役所」に提出した、「聖明神旧格並に神式仕来り口上<sup>2)</sup>」（以下「口上」と略す）がそれである。そこでは、次のように述べている。現代文に直して紹介する。

私たち村の者は、大明神が信太郷に鎮護・ご遷座なされた時に供奉してきて、聖神社と万松院（聖神社の神宮寺）の間に居住していました。そのうちに人数が増えてきましたので、同じ境内の御旅所坂の下のどうけ原という所に移住しました。しかし、ご神慮浅からずして、人数が益々増えてきましたので、慶長五年に王子村地内に除地（無年貢地）を三反八畝廿八歩頂き、そこへ移住しました。……（カッコ内筆者）

聖神社は「社伝によれば、……天武天皇の白鳳3年（675）8月15日、勅願によって信太首（しのだのおびと）が聖神を斎（いつ）き祀ったことに始まる」とされている<sup>3)</sup>。供奉の者が「どうけ原」に移住したのは宝治年間（1247-1249）との資料がある<sup>4)</sup>。そして王子村地内に移ったのは、慶長5年（1600）のこととされる。すなわち、飛鳥時代（593-710）後期の聖神社の創建に伴って、村民の先祖とされる供奉の者が、神社と万松院の間に居住をはじめ、鎌倉時代（1185-1333）の中期に、同じ境内の御旅所坂の下の「どうけ原」に移り、関が原の戦いの年に王子村地内（のちに「古屋敷」と呼ばれる場所）に移住した、というのである。2回の移住の理由はこの「口上」では、人数が増えたため、とだけ記している。

江戸時代の信太大明神（聖神社）周辺の様子を、視覚的に示す資料がある。寛政8年（1796）の『和泉名所図会』（秋里籬島編、竹原春朝斎信繁画、以下『図会』と略す）がそれである<sup>5)</sup>。図1にそれを示す。これを見ると、丘陵ひとつ全体が境内であり（ただしこの絵の範囲は30ha程なのに対し、実際の境内は信太の杜の全体、約300haの広大さであった）、丘陵上の台地に建物が配置されている。いくつかの建物が配置された中央部分に「本社」すなわち聖神社がある。戦国時代に焼失したであろうものを、慶長9年（1604）、豊臣秀頼が再建させたと言われている社である。この社は、国の重要文化財として現在も残っ

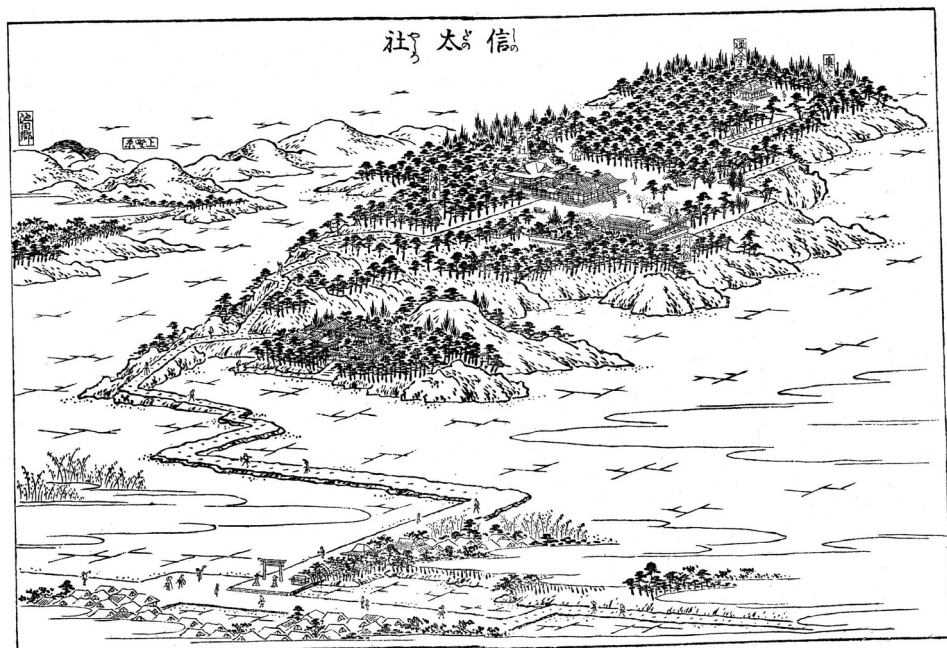


図1 和泉名所図会に見る信太大明神・聖神社

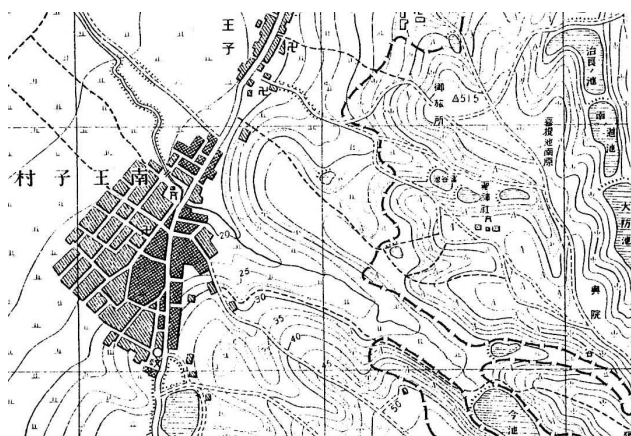


図2 信太演習場一般図に見る聖神社周辺

ている。正面が真南の方向である。

また時代ははるかに下るが、昭和5年(1930)の境内の様子が分る地図が残されている。『信太山演習場一般図』(陸軍第4師団司令部作成。以下『一般図』と略す)がそれである。本論文に關係する部分を図2に示す。これにより『図会』に描かれた部分が約30haであったことが分る。またこの『一般図』には、昭和

5年当時の地名呼称が記入されている。それと『図会』を照合すると、「奥院」と書かれている場所は『図会』では右上すなわち台地の東際にある「奥宮」の建物にちょうど該当する。また『一般図』で「御旅所」とある場所は、『図会』では、一番手前の丘陵地西端に、一群の建物として描かれている所に該当するであろう。

『図会』が出版された寛政8年(1796)は、本村の村民の先祖が、後述する「古屋敷」に移住してから既に200年近く経ち、その「古屋敷」からも、100年程前の元禄11年(1698)

には、隣の泉郷に移住してしまっている。『図会』の左下には、聖神社の参道入り口の鳥居と（現在も同じ位置に聖神社の鳥居がある）、その前に小栗街道、そして街道沿いに村落が描かれている。この村落は一般農村の王子村であり、ここから右、すなわち南へ100m程離れた場所に「古屋敷」があった地区があるが、そこはこの描かれた範囲からは外れ、右下の場所に当たる。

ところで、本村の先祖が聖神社境内に居住していたということを場所まで特定して記述しているのは、『奥田家文書』の中において明治2年のこの「口上」が初出である。この「口上」では加えて、毎年2月の神事において「牛皮墓目的」（牛皮で墓目の墓目の墓目のつくった弓射的）を奉納し、また遷座の際に供奉してきた者の子孫が「箭取株七軒」として奉仕してきたこと、毎年7月28日の角力の神前奉納の際には「箭取之者共」などが土俵づくりなどで奉仕していること、毎年8月15日の祭礼に「当節」は「前後供奉」できないでいること、などを訴えている。

聖神社に関する本村村民の立場をめぐる苦闘の歴史は、すでに詳しい研究がなされている<sup>6)</sup>。その研究においてはしかし、明治2年のこの「口上」に始まる村民を挙げた一連の動き（「口上」に続いて「御歎願書」など<sup>7)</sup>が池田下村御役所に提出されている）については、触れられていない。筆者は、この「口上」に始まる動きには、当時の「廃仏毀釈」の高まりが大きく影を落としていたと考える。

明治維新直後のこの時期は、新政府による太政官布告「神仏分離令」（慶応4年（1868））に端を発する「廃仏毀釈」の運動が急激に強まっていた時期である。この運動は、神仏習合の廃止、神社からの仏教的要素の払拭、寺院の廃止・統合、僧侶の神職への転向、仏像・仏具の破壊、仏事の禁止などの激しく厳しい動きを全国的に巻き起こし、仏教や寺院への深刻な打撃となった。こうした動きは聖神社においても例外でなく、神宮寺である万松院はこの時、除却されてしまった。

本村村民はそれまで、日常の精神的な支えを、檀那寺である村内の西教寺（一向宗西本願寺末寺）に依拠してきた。一方、聖神社の氏子の立場は、「穢多」の村として極めて不利な扱いを受けてきた。こうした状況の中でこの「廃仏毀釈」の動き、すなわち仏教と寺院に対する弾圧の動きが、新政府という国家権力を背景に起こったのである。加えて「口上」によれば「御一新御改革」の「御巡見」に絡んで、聖神社に対する本村村民の関わりを壊そうとする動きも、ふたたび激しくなってきた。そこで、村民と聖神社との繋がりがいかに強いかということを、改めて示すことがこの時点で求められたと思われる。従来主張してきた聖神社の行事と本村村民の深い関りに加え、先祖が境内に居住していたのだと、おそらく初めて表立って主張する「口上」の背景には、こうした事情があったと考えられる。

## 1-2 供奉の者について

聖神社の遷座の際に供奉したとされる者のことを示す資料が、『大阪府南王子村文書』の中にある<sup>8)</sup>。それには「聖大明神供奉者・村由緒書上」のタイトルが付けられている。書かれた年月が未詳であり資料的価値には若干瑕疵があるが、重要な示唆を含んでいるので、その箇所を紹介する。現代文に直し、縦書きを横書きにする関係上、行替え箇所には / を付ける。



泉州泉郡南王子村の来歴について左に申し上げます。／信太大明神に供奉してきた者がおり、その時、六人でした／名前 アズ／ホンバラヤホ／ヒガシバン／ト／ホンパキトラホ／チツネン／アソハン／ホンハホヘホ／それからどれほど年数が経ったか分り難いのですが、貞観年中の頃、聖大明神が官社の列に加えられた折に、この六人の者は改名しました。／アズㄱ太夫／ヒガシバンㄱ若太夫／ホンハキトラホㄱ安太夫／チツネンㄱ助太夫／アソバン 五郎太夫／ホンバホヘホㄱ甚太夫／ホンバラヤホㄱ与太夫／……晌

「ト」と「ㄱ」は何らかの符丁として書き込まれたものであろう。「六人」としているが、実際には7人の名前が挙げられている。「ㄱ」の印が付いているのが6人であるから、この6人を「六人」としているのかもしれない。前述の「箭取株七軒」では、「七軒」が供奉してきた者の子孫であるとしている。

いずれにしても、村民の祖先は、この6軒ないし7軒から出発したということになろう。

ところで、聖神社が遷座したとされる白鳳3年(675)の頃は、朝鮮半島の百済、新羅や高句麗からの渡来や帰化の、最後にして最大のピークの直後であった。そして百済、高句麗が減じた後は、唐、新羅からの渡来と帰化が9世紀はじめ頃まで続き、10世紀、平安時代の初中期頃には、帰化も終息したとされている。

これら大量の帰化人は、大和朝廷、大和国家の政治・経済・文化の根幹部分において重要な役割を果たし、日本の民族や文化の形成において、現代にまで及ぶ多大な貢献と影響をもたらした。信仰の分野において帰化人は、大和朝廷からその氏族に与えられた土地の氏神として「社」を造り、祀った。聖神社もこの一つであろう。聖神社創建の氏族の長である信太首は「百済国人百午之後也」と『新撰姓氏録』に紹介されており<sup>9)</sup>、百済から渡来した帰化人であったとされる。

その聖神社の創建の時から下働きとして従事し、長く神社に「供奉」したのがこの6戸ないし7戸なのであろう。カタカナ書きは、渡来者としての名前であったと思われる。そして貞観の頃、正確には貞観元年(859)、聖大明神が官社の列に加えられたのを機に、改名したということであろう。「太夫」の呼称は、神に仕える者のうち下位にある者や、技芸でもって神に仕える者に多く付けられた。

ちなみに、上の7人の名前の中「太夫」「若太夫」「助太夫」の3人の名は、慶長9年(1604)の本村の資料<sup>10)</sup>の中に見出すことができる。またそこには「二郎太夫」の名も見られる。これから75年後の、延宝7年(1679)の「王子村検地帳<sup>11)</sup>」には「若太夫」「源太夫」の名が名請(地主)として記載されている。「若太夫」は検地に際しての「案内之者」を、「源太夫」は庄屋を努めている。元禄3年(1690)の「死牛馬取捌心得一札<sup>12)</sup>」における村の世帯主全員と思われる署名の中には「若太夫」「安太夫」「五郎太夫」「与太夫」の名があり、ほかに「二郎太夫」の名がある。元禄12年(1699)の古屋敷の名請には「安太夫」の名が見られる<sup>13)</sup>。宝永元年(1704)の「村方申合<sup>14)</sup>」の世帯主全員と思われる署名には、太夫呼称の名前は出てこない。享保8年(1723)の「村方申合<sup>15)</sup>」では「次郎太夫」「源太夫」「庄太夫」が見られる。下って幕末、天保15年(1844)の「田畑屋敷持主有所書訳帳<sup>16)</sup>」や名寄帳の類(地主名を列举)、あるいは明治初期の嘆願書における村民全員の署名<sup>17)</sup>の中には、太夫呼称の名前は出てこない。

このように、太夫呼称は出たり消えたりしながら、幕末の頃には無くなったと見てよいであろう。何らかの都合や考えがあって、一般の農民の呼称に改めていったのであろう。ただし前述の7軒の子孫の家系は、少なくとも江戸時代の間は、前述の「箭取株七軒」として維持されてきていたものと思われる。

## 2. 「古屋敷」について

### 2-1 移転の理由

本村村民の先祖は、慶長5年(1600)に「どうけ原」から、のちに「古屋敷」と呼ばれるようになる場所に移転した、とされている。その表向きの理由は、前述のように単に人口増ということであるが、ほかにも何らかの理由があったのではなかろうか。

考えられる理由は、ひとつには農耕との関係である。彼らは聖神社の下で働きながらも、自らの食料確保などのために、信太郷に隣接する泉郷(のちに南王子村になる場所)を開拓したり、ほかの農村の分散した農地に「出作」をしたりしていたと思われる。「どうけ原」からこれらの場所までは、相当の距離があった。そこで、農作業の便のため、それらの近場に移りたい、という要求が一方にあったと思われる。他方で神社側にとっても、彼らを近くに常駐させておくメリットが無くなってきた、ないしは常駐に何らかの不都合が生じてきた(たとえば安土桃山時代末期の政治的混乱も影響があるかもしれない)、ということがあったであろう。その不都合な事情の中に、人口増のも含まれていたであろう。次に述べるように、この頃には村民は30軒前後に膨らんできていたと思われるからである。

移転先の居住地の確保は、聖神社の斡旋でなされたであろう。「どうけ原」は無年貢の土地であったであろう関係上、新たな居住地も除地(無年貢地)とされた<sup>18)</sup>。移転先は王子村の地内、王子村の南から150mほど離れた所である。谷筋下部の、あまり条件の良い場所ではなかった。

### 2-2 移転した軒数

移転した軒数を推定できる資料は、二つ残されている。

その一は、移転して4年後の慶長9年の「泉州泉郡信太郷かわた村御指出」(以下「御指出」と略す)である<sup>19)</sup>。これは、村民が耕している農地(一部屋敷)の、場所、面積、年貢高(分米)、耕作者(名請人)を一覧にした届出書である。「かわた村」とは、移転先の「村」に付けられた行政上ないし他村からの呼称であろう。ほかに、その居住地は「穢多屋敷」などとも呼ばれていた。村民自らが当時、この村や居住地をどう呼んでいたかについては、判然としない。

この「御指出」には、名請人として28人の名前が挙がっている。ほかに覧外に1名の名前(甚五郎)が○印付きで書かれているが、王子村の庄屋か何か、立ち会った者の名前であろうか。28人以外にも、農業に携わらない故に名前が挙がっていない者が、移転者の中に何人かはいたであろう。

その二は、移転して98年後の元禄11年(1698)に、村民は再び隣の泉郷に移転することになるが、その際、跡地3反8畝28歩の新たな所有者が決められた。その新たな所有者の記録が、翌元禄12年に作成されている。「畑反畝高寄帳」(以下「高寄帳」)がそれであ

る<sup>20)</sup>。この「高寄帳」には、土地が29筆で記録されている。当時は、土地を名請単位で記録し、その土地の一部が他の者に売却・譲渡されても、その証拠は庄屋等の所に残されるが、名請の名義は継承され、土地を分筆・細分化することはなかったようである。この「かわた村」の土地も、除地とはいえ、その中を名請のような形で村民が分割保有してきたのではなかろうか。この29筆は、慶長5年から継承してきた土地分割が残された可能性が高いと思う。すなわち、慶長5年当時の土地所有者数も、29軒前後であったであろう。このほかに、土地保有をせず、借地人ないし借家人としてここに住んだ者が、何軒かはあったであろう。

従って、この二つの資料から、移転した村民（世帯主）は30人前後、30軒前後と考えても、大きく外れたことにはならないであろう。

盛田らの著書では、天保14年（1843）に書かれた「村方由来書抜覧<sup>21)</sup>」においては、元禄11年（1698）の「屋敷替引越」は「家数卅二軒、人数メ式百三人」としているが、これはその前後の資料での数字を照合すると「いかにも少なすぎて納得しがたい。……どうけが原から王子村の穢多屋敷へ移ったと伝えられる慶長五年当時の家数・人数を誤り伝えたものではないだろうか」としている<sup>22)</sup>。筆者も同感である。前述のように、慶長9年の「御指出」や元禄12年の「高寄帳」は、移転家数が30軒前後であったことを強く示唆している。従って、32軒、203人というのは、ありうるとしたなら、慶長5年の「どうけ原」からの移転の数であろう。

### 2-3 移転時の農地

この屋敷地以外に「かわた村」の村民は、農地を持っていた。前述の「御指出」にそれが書き上げられている。それによると、村民の農地等の分米（石高）は、荒地を除いて59石1斗2升9合、とある。この「御指出」に基づく先行研究<sup>23)</sup>によると、農地は12の字に、他村の者と入り組んで散在し、合計4町5反4畝19歩あった（若干の「屋しき」を含む）。1町当たり13石の生産見積（石高：分米）である。

盛田らの著書<sup>24)</sup>では、本村村民は文禄検地（太閤検地）の頃（1581～）には「上泉郷の地に、……146石余の高を保持する農民に成長して」おり、慶長9年（1604）には加えて59石余を「あわせ持つ」としているが、30軒ほどで200石以上というのは、あまりにも多い。後のことであるが、正徳3年（1713）の本村は、94軒、9町8反8畝26歩で、分米142石4斗9升8合であった<sup>25)</sup>。1町当たり14石余、1軒平均1.5石である。このことから見ても、慶長9年時点、すなわち移転当時は、30軒ほどが4町5反余の散在する農地を持ち、その分米は59石余、というのが実際の姿であったであろう。上泉郷の地の本格的な開拓は、この移転後のことであった、と考えるのが自然である。

### 2-4 「穢多屋敷」の姿

さて、この散在した農地を持つ「かわた村」の「穢多屋敷」は、どのような姿のものであったであろうか。

場所は、前述のように王子村の南150mほど、鬱蒼とした広大な信太の杜の、谷筋のひとつの下部で、周囲からは若干低い土地である。立地としては、洪水などの危険があり、あまり恵まれていない。前掲の図2でここを示すと、南王子村の鳥居印のある場所（八坂

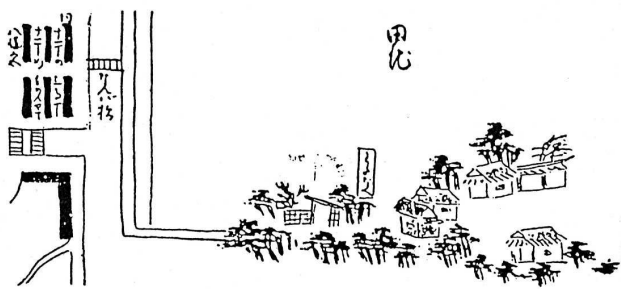


図3 寛文10年大坂絵図の渡辺村



図4 新版大坂之図の渡辺村

神社)の北側、小川を渡った所の一群の集落の場所に当たる。

面積は、後の延宝7年(1679)の検地帳に、王子村の除地として「穢多屋敷 三拾五間三尺 / 三拾貳間五尺五寸 三反八畝貳拾八歩 壺囲<sup>26)</sup>」と記録されているが、これは正確なところであろう。3反8畝28歩は「高寄帳」などの記録とも符合する。南北35間3尺(68m程)東西32間5尺5寸(63m程)で、4200m<sup>2</sup>程である。家数を30軒とすると、1軒当たり通路や庭を含めて140m<sup>2</sup>であった。移転当初は、それなりの余裕のある広さであったことを示している。

「壺囲」とあるのは、延宝7年の検地の当時には、この「穢多屋敷」と呼ばれる集落(王

子村の一集落の扱い)に、何らかの囲いが施されていたことを示すのであろう。この集落にどのような「囲い」が成されたかは分からないが、当時の他の被差別部落に施された「囲い」の形状は、筆者の知った限りにおいては、三つある。

その一は、森杉夫が紹介しているもので、元禄8年(1695)、河州丹北郡更池部落(現松原市内)が、屋敷地の周囲を竹垣で囲うように命じられたという、竹垣である<sup>27)</sup>。

その二は、後に皮革産業の西日本での中心地となる「渡辺村」の当時の姿であり、樹木に囲われている。寺木伸明は、寛政10年(1670)の大坂絵図(関西大学図書館蔵)に「木々に囲まれた五軒の家が記され……村への入口に簡単な門が描かれている」ことを紹介している<sup>28)</sup>。その絵図を図3に示す。また同じ頃の渡辺村(同村は「渡辺の里」に発し計4回移動させられられ5つの場所に住んだ<sup>29)</sup>)を描いた新版大坂之図(大阪歴史博物館蔵)が、同じ寺木伸明によって紹介されている<sup>30)</sup>。9軒ほどの家があり、それを樹木が囲んでいる。村の入口には門が描かれている。図4にそれを示す。

その三は、都市部の話であるが、江戸浅草新町の「囲内」(かこいない又はかこいうち)であり、幕末期には一万三千五百坪の広さを板塀と小さな堀で囲んでいたという<sup>31)</sup>。

本村の「壺囲」がどのようなものであったかは、これらの当時あった事例の、竹垣、樹木、板塀から想像するほかはないが、板塀は都会的・江戸的な仕掛けであるので、竹垣または樹木といったところであろうか。筆者としては樹木ではなかったかと想定している。



## おわりに

この「古屋敷」の地区から、元禄 11 年（1698）には、その後の定住の地となる明確な独立村としての「南王子村」に移住する。これ以降の時期については、次稿で述べることにしたい。

## 引用文献

- 1) 盛田嘉徳ほか『ある被差別部落の歴史—和泉国南王子村—』岩波新書、1979、p. 1
- 2) 南王子村文書刊行会編『大阪府南王子村文書 第五卷』解放出版社、1980、p. 296
- 3) 谷川健一編『日本の神々—神社と聖地 3』白水社、1984、p. 362
- 4) 南王子村文書刊行会編、前掲書、p. 542
- 5) 堀口康生校訂『和泉名所図会』柳原出版、1976、p. 202
- 6) 盛田嘉徳ほか、前掲書、p. 195-p. 205
- 7) 南王子村文書刊行会編、前掲書、p. 334-p. 364
- 8) 南王子村文書刊行会編、前掲書、p. 542
- 9) 神道大系編集会編『神道大系—古典編六—新撰姓氏録』精興社、1981、p. 817
- 10) 奥田家文書研究会編『奥田家文書』第七卷、大阪部落解放研究所、1972、p. 685
- 11) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 699
- 12) 奥田家文書研究会編、前掲書、第十二卷、p. 364
- 13) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 770
- 14) 奥田家文書研究会編、前掲書、第十五卷、p. 299
- 15) 奥田家文書研究会編、前掲書、第十五卷、p. 300
- 16) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 877
- 17) 南王子村文書刊行会編、前掲書、p. 345-p. 351
- 18) 奥田家文書研究会編、前掲書、第六卷、p. 9、「王子村御検地帳面ニ有之穢多屋敷と申儀ハ往古者御除地ニ御座候、此儀ハ信太明神ヲ給り候御除地御座候、証拠と申者……」
- 19) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 685
- 20) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 770
- 21) 奥田家文書研究会編、前掲書、第六卷、p. 418
- 22) 盛田嘉徳ほか、前掲書、p. 7
- 23) 高市光男「近世部落の人口動態とその背景—和泉国泉郡南王子村の場合—」西播磨地域皮多村文書研究会編『近世部落史の研究〈下〉』雄山閣出版、1976、p. 203
- 24) 盛田嘉徳ほか、前掲書、p. 3)
- 25) 奥田家文書研究会編、前掲書、第一卷、p. 1、「和泉国泉郡南王子村諸色指出帳」
- 26) 奥田家文書研究会編、前掲書、第七卷、p. 752
- 27) 盛田嘉徳ほか、前掲書、p. 7
- 28) 寺本伸明『被差別部落の起源—近世政治起源説の再生』明石書店、1996、p. 119
- 29) 稲垣有一・寺本伸明・中尾健次『部落史をどう教えるか（第2版増補改訂版）』解放出版社、1999、p. 42
- 30) 寺本伸明『部落の歴史—前近代』解放出版社、2002、p. 68
- 31) 塩見鮮一郎『弾左衛門の謎』河出文庫、2008、p. 156

参考文献

- ・高橋貞樹『被差別部落一千年史』岩波文庫、1992
- ・角岡伸彦『はじめての部落問題』文春新書、2005
- ・西播地域皮多村文書研究会編『近世部落史の研究—上・下』雄山閣出版社、1976
- ・塚田正朋『近世部落史の研究—信州の具体像』部落問題研究所、1986
- ・全国部落史研究交流会編『近代都市のあり方と部落問題』解放出版社、1998
- ・黒川みどり『地域史のなかの部落問題—近代三重の場合』解放出版社、2003
- ・関晃『帰化人—古代の政治・経済・文化を語る』講談社学術文庫、2009（1956）
- ・上田正昭『帰化人—古代国家の成立をめぐる』中公新書、1965
- ・平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館、1993
- ・和泉市史編纂委員会編『和泉市史—第一巻』大阪府和泉市役所、1965
- ・和泉市史編纂委員会編『和泉市史—第二巻』大阪府和泉市役所、1968